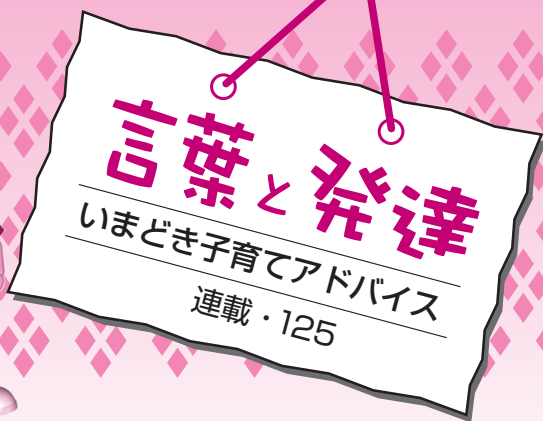




就学という 大きなハードル

その3

通常学級で過ごして大学生になったDさん



言語聴覚士 中川信子

ときどき町でばったりお会いするDさんのお母さんと数年ぶりにお会いしました。「原稿のタネに使ってもいいですか?」と言ったら「どうぞ、どうぞ、こんな私たちでよかったら」ということでしたので、Dさんについては内容を脚色せずにお話しします。

始まりは「じとばが遅い」

1歳10カ月するとき、「ことばが遅い」「口まねするとき、とても言いにくそうにするが何か器質的な問題でもあるのかと心配」ということで相談に見えたDちゃん。お姉ちゃんも人見知りがひどくて心理相談に通っていたためか、お母さんはゆったりかまえて、Dちゃんのための「安心の港」になっていました。

内向的で人見知りがひどく、いささかマイペースで自分の興味には強く固

執します。でも、周囲の大人の話しかけには「うん」「うん」と応じることができません。発達の個人差の範疇と考え、3カ月おきのフォローをしました。

2歳10カ月ころから徐々に単語が増え始め、喃語のようなおしゃべりがさかんに出てきましたが、3歳すぎても発音がつきりせず、人にはなかなか通じません。3歳2カ月時点で「ア、ジョー」(象)、「ボーウ」(ボール)が新しく言えたり、「いただきます」「ごちそうさま」の一部を言えるようになった、とお母さんと一緒に喜ぶような「ゆっくりさ」。現時点で発達検査をすれば遅れているという結果が出るに決まっているので、もっと伸びてから調べましょう、とおかしな理屈をつけてのフォローでした。

なぜなら、今までにお会いしてきた通常の「遅れのある」お子さんとはどこか違って、「この子はきっと分かって

いるわ！ 将来が楽しみ！」という感じがあったからです。

地域にある少人数の幼児グループに通うようになり、3歳半近くなつてことは面白いように増えてゆきました。発音の不明瞭さは相変わらずです。お母さんの希望でSTの継続的指導を受けることになり、個別指導と少人数指導とに通いました。ここでも、発音に自信がないため性格的に内気なためか、主張することなくすぐに引込んでしまう様子は変わりませんでした。参加を楽しんでいる様子でした。

お母さんはそれこそ「つきつきり」という感じで対応していましたし、Dちゃんも、そういうお母さんを頼りにしていました。5歳時点の発達検査では、若干ゆっくりめではあるけれども、知的障害はなく、正常範囲である、という結果でした。

STのいるセンターに3年近く通つ

てきました。お母さんが大学生になつたDちゃんにそのころのこと覚えてる？と聞いたら「うん！ キリンのおもちがあつた！」と答えたそうです。キリン以外にもいっぱい遊んだのにね。一つのことには焦点があたり他のものや全体が見えなくなるというDちゃんの行動特徴がよく現れています。

通常の学級へ

就学児健診のころには、初めての人とも何とか受け答えができたので、特に問題を指摘されることなく通常の学級に入りました。もっとも、事前にお母さんからよく話して聞かせてあったからかもしれません。

初めてのことに取り組むのが不安ですぐに泣いてしまつとか、一つのことじつくり取り組むけれども、取り組みすぎて別のことに切り替えにくいな

ど、何となく多数派の子どもたちとは異質の雰囲気を持っているDちゃん。すぐに混乱して泣くので、イジメの標的にされかけたり、いろいろな危機的状況はありましたが、担任にも、学校にも恵まれて試験はたくさんありつても学校生活を重ねてゆきました。

お母さんには「SOSが出たら、通級制の学級の並行利用も考えてね」とお話しした上での就学でしたが、お母さんは先生に「何かあったら、私が付き添いますから！」と宣言したのでそれで、結局通常の学級のみで過ごしました。お母さんの付き添いが必要な場面もなかったようです。話を聞くと、担任の先生のDちゃんへの目配り、学級全体への配慮、指導力は大したものだったようです。

ひ弱なお子さんなので中学からは私立に、という考え方もあるでしょうが、Dちゃんは公立校に進みました。今度

高校で才能発揮、大学へ

Dちゃんは本を読むのが大好き。文字の間から躍る心があふれているような感じの生き生きした文章を書きます。

ばかりはお母さんも「何かあったら私が付き添います！」という伝家の宝刀を抜くわけにもいかずハラハラしながら過ごしたそうです。これまたいろいろなことがあつたようですが、お母さんは「何があつてもお母さんはDちゃんの味方だからね」といつも言い聞かせました。学校の役員もせつせとやり、年中、学校に出入りしました。

安心感が根本にあるためでしょうか、それとも、Dちゃん自身が成長したためでしょうか、中学生生活もつつがなく終えました。そればかりか、次第に勉強の面で頭角を現して進学校と言われる高校に合格しました。

英語や古文の文法なら任せてちょうだい！ そのころのDちゃんは「お母さん、勉強って面白いね。やればやっただけの成果があるから」と言っていたそうです。たまたま少人数制の、Dちゃんの様子に合わせて指導してくれる塾にめぐり合い、その先生の励ましも自信をつける助けになつたようです。

幼いころからやっていたバレエが大好き(運動が不得意、動きがぎこちないので、演技手には不向きですが)、演劇にも興味を持ったDちゃんは、高校では演劇部の部長を務めました。学園祭の演目を決め、小道具をそろえ、りっぱにやり遂げました。

とは言え、やっぱり、初めてのことが苦手、地理が分からない、従つて電車に乗るのもまず一度目的地までお母さんが一緒にいて行き、それを覚えて2回目には一人で何とか行ける、というDちゃん。大学受験を考える際に

も「電車の乗り換えが簡単で、降りてからも道に迷わないところ」というのが第一の条件だった、というからおかしい。それで入ったのが、すごい難関校といわれる学校です。学力面はともかく、面接できつと落ちるだろう、と予測していたお母さんもびっくりしたそうです。落ちたときの慰め方まで考えていたのでしょう。

今は楽しい大学生活を送っています。大学4年生のお姉ちゃんのレポートを代わりに書いてあげたりもしているそうです。「友だちはまだできないみたいなんですけどね」とお母さん。

さらにびっくりするのは、そのDちゃんも塾でアルバイトをしていることです。マンツーマンに近い指導をする少人数の塾ですが、そこで、大好きな国語や英語を高校生に教えているそうです。

Dちゃんのお母さん

「あの子の本好きは並大抵なものではなくて、私もおかげで、旬の小説を読めてとても楽しいです」とおっしゃるお母さん。「ずっとこの子は学習障害、って思ってたんですけど、ほんとに面白いんです、困ったこともたくさんありましたけど、そのつど、誰かに助けていただいて。ほんとに変わった子なんですよ、もつとも私も変わって、いるほうだと思いますけど」っておっしゃっていました。

2歳ごろのことばが遅かったところ、私はお母さんにこう説明したそうです。「Dちゃんのことば」の容れ物はほかの子に比べるととても大きくて深いので、その容れ物がいっぱいになって外にあふれて出てくるまでにうんと時間がかかるんだと思いますよ」と。

花粉アレルギー発症の説明に使われるような小さなコップと大きなバケツのようなイメージで私はお話ししたのだと思うのですが、お母さんは、「中川センセイに、Dのことばの容れ物は深い、と言われた」と、そこをとても大事なよりどころにして来てくださったのだそうです。ありがたいことです。

Dちゃんの成育歴や現在の行動にはアスペルガー症候群や学習障害のお子さんとの共通項もたくさんありますよね。でも、それを障害ではなく特性として育ち、特段の心のダメージもなしにきたのは、「何があっても最後まで味方だよ」と言ってくれるお母さんの存在が、決定的に大事だったと感じます。小さいころ、「きつと『赤毛のアン』みたいな、ちよつと変わっているけど、才能のきらめきを発揮するような子になるんじゃないかな」とお母さんにお話ししたおぼえがあります。『赤毛のア

ン』はお母さんと私の少女時代の共通する愛読書でもありました。この先のDちゃん親子のあゆみが楽しみです。

小学校は固定制の学級に、中学から通常の学級に移ったEくん

最後の例はEくん。幼児期、ことばが遅い、他の子とかかわれない、決まりきった遊びしかない、という主訴で療育に参加しました。広汎性発達障害の範疇のお子さんであろうという様子でした。マイペース。でも、周囲が全く見えていないわけではなく、友だちにゆずることもできていました。

就学相談の結果、通常の学級と通級制の学級の併用で、という判断でしたが、親御さんは「無理させたくないの」で、固定制の学級を」と希望、固定制の特別支援学級に入りました。自閉症のお子さんの多い静かな少人数の学級、

ベテラン先生の指導のもと、のびのびと暮らし、勉強面でも着々と力をつけ、4年生ころにはほぼ学年並みの学習に追いつきました。授業の半分以上は交流先（自分の該当学年の学級）に向いて授業を受ける状態になり、学校側からも「通常の学級に移りませんか？」と声かけがありました。親御さんも本人も「固定制の学級のほうが居心地がいいから」と断って6年生まで固定制の特別支援学級でぬくぬくと過ごしました。

そして中学から地域の学校の通常の学級へと移りましたが、特段の違和感もなく淡々と過ごして、高校へ。確かにマイペースなところはあるのですが、それが逆にかっこいいリーダーの姿とも見えるのです。

幼児期に視線が合わず、コミュニケーションが取れなかった、あれはいつたい何だったの？と、周囲の人たちは

狐につままれたような感じだそうです。Dさん、Eくんに通じていることは、傷つきやすく混乱しやすい幼児期・低学年の時期に無理をさせないですんだことだと思います。保護者が世間体や将来のことではなく、今現在の子どもにとって居心地のよさを第一に考えたこと。その背景には、保護者が2歳、3歳の早期から「ほかの子と比べるのではなく、その子なりのやり方で育つことがOK」とする療育的な考えに触れ、子どもの実態を直視しながら、子どもを支えたのが大きかったと感じます。

早期発見・適時介入・長期支援が必要なのは、発達障害（かもしれない）お子さんたちがDさん、Eくんのようによき育ちを遂げる可能性を広げてくれるからだと思います。